

# 「子どもを育て、自分を育てる」

小川 剛

標題は、最近刊行された図書の書名である。<sup>(1)</sup>これは、今日の子育てをめぐる状況への提言としてきわめて示唆に富んだものを含んだものといえる。現在、数多くの育児書が出版されているが、その多くは、当然のことながら、子どもの発達のことや親の配慮のことをこと細かく述べたものであり、いわば子どもに焦点を当てて書かれたものである。しかし今日の子育ての状況に目をすえてみると、親のあり方こそ問われなければならないという実情があきらかになってくる。前記の図書は、子どもの発達と親のそれとの相関関係に留意し、親の成長に焦点をすえて書かれた育児言といった趣きをもつ。

私自身、このことに気づいたのは、二十余年前のことであった。大学院を出

て、初めて勤務したところが私立女子大であったが、そこでの学生たちとの読書会の席上、ある学生が、「子どもを育てることで、私も成長できるから、ぜひ結婚して子どもを生み育てたい」と発言した。当時、初めて父親となり、妻とともに育児に悪戦苦闘していた私にとって、それは、新鮮というか、意表をづく発言として響いた。「エライひとだな」という思いとともに、「子どもを育てる」ことに、このような素晴らしい側面があることを知らされた。これを妻にも告げ、そのような気がまあで、子育てに当たろうと話し合った記憶がある。

その学生が自分の発言内容をどれだけ自覚的にとらえていたかはわからない。しかし、今、ふりかえって、その発言の意味を吟味してみると、これには、かなり深い意味や貴重な価値が含まれていることがわかる。

今日、子育てをめぐり、さまざまな病的な現象がみられ、さまざまな発言がされているが、根本のところ、子どもの成長と親のそれとの相関関係が見落されているのではなからう。無力な生物体として生まれ、宇宙への挑戦をも可能にする力をもつ存在にまで成長する人間。その成長過程には、成熟という生得的な要因と学習という後天的な要因との相互作用がかかわるわけだが、乳幼児期における学習での親、とりわけ母親の果す役割は大きい。この期においては、成長が最も著しく、人間としての基礎が築かれる。しかもこの期の子ども

は、全面的信頼をもって、自分の全存在を母親に委ね、母親の与えてくれるものを、無批判に、「学習」として吸収していく。これらには、飲食物という物質的なものとともに精神的なもの、たとえばものとりえ方、考え方、態度といったことも含まれる。このような事実に気づくと、親、とくに母親となることはきわめて重いことであり、あだやおろそかではつとまることでないことがあきらかになってくる。親たるものは、子どもの信頼に応え、その将来のための人間的基盤づくりという大事な任務を全うするためにも、力量を高めていかなければならない。

近年、「親業」なるものが、アメリカから導入され、インストラクターにより青年男女を対象に、親としての技術についての訓練がなされるようになってきた。親となるためには、必要な技術体系を学ぶということも必要であろう。しかし親たるものに求められるものは、そのような技術的なものに尽きるものではないであろう。生命をもち、価値を実現しながら社会的存在となっていく人間の親であるためには、たんなる技術をこえた実存的なものが求められてこよう。この「実存的なもの」は、親たるものが、自覚と体験とを通して体得していくものである。この他に、親として、ぜひ、身につけるよう努力していきたいものも、人間をして人間たらしめていく力がある。これは、人間に求められるものであり、また、人間をつくる力でもある。したがって、子どものなか

に育てたい力でもある。このような力として、前掲書では、「主体的にかかわる力、人と共感し合う、共有し合って喜び合える力、人との関係をより質のよいものに育てる力等々、人間らしさのなかに深くかかわる力」が挙げられている。ここに示されたものは、社会的存在者としての自覚に立ち、創造的に生きていこうとする人間に求められるものである。そして、今日の状況においては、これは、自然成長的な発達に期待することができないものであり、親の自覚的な対応によって、はじめて可能になるものである。

さまざまな関係が錯綜し、さまざまな力が働く現代社会においては、子育ては、社会的な規模で、自覚的にすすめられなければならない。そのためには、社会的な視野に立ち、子どものたしかな成長を実現していける豊かな育児力をもつ親たちの育成が図られていく必要がある。前掲書は、このような視点に立つて行なわれた活動の記録である。ここでは、子どもの成長と親のそれとが相互関係にあること、「子どもを育て、自分が育つ」筋道が多くの事例を通して示されている。このことからあきらかなことは、今日の子育てをめぐる問題は、究極的には、親の問題であることである。子どもが育ちにくいという状況は、親が十分に成長していないことの反映であろう。親自身が、自己を確立し、広い視野のもと、物事を見きわめ、遠い将来をも展望しながら、自らの責任と判断にもとづいて思考や行動を選択できるようになっていけば、心の余裕

も出てこようし、子どものこともよくみえてこよう。そのような親のもとでは、たしかな能力をもち、人間味あふれた子どもも育てこよう。

問題は成人教育にあることになる。現在、両親教室として行なわれているものの多くは、医師、心理学者など専門家のお話を聞くという方式のものである。子育てには、理論的な知識・情報は必要である。しかし、評論家風のもの知りというだけではつとまることではない。それは、絶えず判断と行動とを求め、事態に的確に対処する実践的な力によって支えられるものである。実践的な力は、各人の実践を対象化した学習を通して得られる。たとえば、子育て中の人たちが、互いにその経験を対象化して学び合うという方式はきわめて有効である。というのは、子育てというのは、本来、不完全な存在である一人の人間が十分にやりおこせるものではなく、多くの人びとによる共育としてすすめられるべきものである。親自身が、この共育に主体者としてかかわるなかで、成長し、それが子育てにはねかえっていく。このような筋道が、現在、子育てに求められているといえよう。

註(1) 国立市公民館保育室運営会議編『子どもを育て 自分を育てる——国立市公民館「保育室だより」の実践』未来社

(2) 同上書、六四頁。

(お茶の水女子大学附属幼稚園園長)